

問 1

資料 1 においては、知識人は社会に存在する貧困や人権抑圧といった問題を発見し、それらを解消するための社会改革に取り組みねばならないと述べられている。その一方で、現実の知識人が自分に権威と富を与えてくれる現体制を擁護する傾向にあること、またそのために社会問題を軽視しがちなことが批判されている。つまり資料 1 は知識人の持つべき「視野」と「問題関心」について述べたものである。

次に資料 2 では戦前の植民地において、原住民知識人が帝国主義を批判し、ナショナリズムの高揚をもたらしたという歴史的事実に言及している。そしてその背景として、原住民知識人が当時の先端知識にアクセスできる二重言語能力を有していたことが述べられている。すなわちこの資料は知識人の果たしてきた「役割」と備えるべき「能力」について論じたものである。

日頃見過ごされている問題や人々の意識を明確に言語化し、公衆の代弁者となる点に知識人の存在意義を見出しているのが資料 3 である。ただこの資料では知識人が聴衆に迎合する態度は批判されており、私的な感性や信念に基づいた言葉を用いる必要性も説かれている。知識人に求められる「能力」と「役割」に加えて、知識人のあるべき「姿勢」について触れているのがこの資料である。

最後に資料 4 だが、この資料が論じているのは知識人が政治的権力から独立することで権威を与えられる一方で、政治的行動に参画していかなければならないという知識人の二面性についてである。また実際の政治行動においては、知識人は様々な危険を孕みながらも、集団を形成して組織的に行動していかなければならないということも述べられている。つまりこの資料は知識人の行動する「目的」と「方法」に力点を置いたものである。

問 2

福澤諭吉は当時の社会を、人心の騒乱が未だ収まらない時代と捉えていた。ただそれは必ずしも否定的な見方ではなく、人々が西洋文明を取り入れ、人の身を安楽にして心を高尚にしていこうと発憤していた、つまり文明の進歩を目指していたことに起因するとも捉えていた。

こうした状況の中で、文明を進歩させるためには世論に同調せずに勇気を持って持論を述べるべきであるということを福澤は人々に訴えていた。加えて、無理に意見の統一を試みる必要性のないことと、広い視野を持つこと、過去に学び未来を見通すことの大切さについても述べている。

こうした福澤の言葉を踏まえた上で、現代の重大な社会課題の一つとして、ここでは移民を巡る社会的摩擦について取り上げたい。人口減少局面にある我が国において、社会を支える労働力として移民の受け入れは必然であるが、受け入れ態勢が整わないままでの移民の受け入れは、社会不安をもたらし、雇用や治安の悪化の原因を移民たちに求め、彼ら彼女らを排斥しようとする風潮をも生み出しかねない。物質的繁栄を維持するための手段が精神上的不安をもたらし、福澤の言葉を借りるならば、「身を安楽にすること」と「心を高尚にすること」とが乖離してしまう危険がある。そのため、今後の文明社会のあり方を考える上で、移民はその受け入れの是非も含めて、検討せねばならない重要な課題である。

問 3

上述の課題に知識人として向き合おうとするならば、まずは広い視野で問題を捉え直すことが重要である。移民という現象を日本という国を超えて、国際社会の問題と捉えると、世界には雇用が不安定で貧困に陥りやすい社会が存在し、安定した収入を求めて国外で労働をせねばならない人々がいるということである。であれば、まずはこうした貧困の問題に取り組むべきであろう。

その上で我が国における移民受け入れのあり方について、自らの信念を人々に訴える場合には、世論に迎合することのないよう留意せねばならない。移民排斥を主張する右派勢力からも、移民を安価な労働力として歓迎する財界からも距離を置き、公正な立場からあるべき社会像を明確に言語化する必要がある。

加えて課題解決にあたっては領域横断的な知性が必要になる。例えば国内に潜在する労働力の活用については経営学的視点が、生産性向上のためには情報技術の知見が、在留外国人と治安の関係の検証については統計学的アプローチが、異文化との融和については人文学的感性の錬磨がそれぞれ必要になるだろう。

まとめると移民受け入れのあるべき姿を考えるためには、問題を正しく設定できる広い視野と世論に縛られない姿勢、領域を横断する知性が必要である。それはとりもなおさず、これらを兼ね備えた社会の先導者になることこそが、私が総合政策学部での学びを通じて目指す目標だということの意味する。